

『俵かさね耕作絵巻』考

加藤 秀幸

はじめに

『俵かさね耕作絵巻』は、管見によれば、現在三本ある。本来「俵かさね」と題されていたようであるが、最も早く世に紹介された東京大学史料編所蔵本⁽¹⁾(以下史料本と称す)が、巻頭に「たはらさね耕作」とあったことにより、題箋も「たはらさね耕作絵巻」と称され、これに準拠してか、他本もかく称されているようである。ここでもこの名称を踏襲する。

他本とは、一本は福岡市博物館所蔵本⁽²⁾(以下福岡本と称す)で、博物館開設の際購入され、目録に登載、展示され、昭和六十三年九月の佐賀県立美術館展観の『田園風俗画』⁽³⁾図録に小版ながら、全巻掲載されているので、全容は観取し得る。尚、この福岡本は、伯爵松浦厚氏の旧蔵本で、昭和三年、史料編纂所によって、雨乞のための風流踊の部分のみが写真撮影⁽⁴⁾されている。

他一本は、柳孝氏所蔵本(以下柳本と称す)である。平成二年九月、「太平記の世界展」に出陳され、その図録⁽⁵⁾に一部が紹介されており、筆者はこの展観によって、はじめてその存在を知り、のちに柳氏の御好意により実見した。

以上「俵かさね」絵巻三本を、筆者は実見する機会に恵まれた。しか

し後述の如く、或は他にもまだ存在するかも知れぬが、今一応管見に入ったこの三本によって、考察することにした。

ここで先学の論考を振り返って、次第してみると、

史料本は、昭和二十六年、高柳光寿氏⁽⁶⁾によって、はじめて紹介、農耕技術史の面よりも論考され、口絵に掲載された龍骨車はそのまま数多くの教科書に、図に起して記述され、ついで、松島栄一氏⁽⁷⁾によって同様に論考され、疑問点も指摘されていた。その後、美術史の方面より、久野幸子氏⁽⁸⁾により、四季耕作図屏風の伝写、展開の一分野として論及され、ついで、渡部武氏が世界史的規模の「耕織図」の悉皆調査研究の中で論及⁽⁹⁾されており、先行の論考全てが挙げられ、史料本については、全てが解明された感があった。その後、河野通明氏⁽¹⁰⁾がはじめて、史料本と新出の福岡本との比較検討を口頭発表⁽¹⁰⁾されている。

ここでは、これら先学の論考に多くを依拠しつつ、新たに出現した柳本を加えた三本の比較検討を通じて得た、筆者なりの考察を述べる。

この三本、殊に詞書については、福岡本・柳本を校合することによって、相互の補完により、原本作者による詞書を完全なものに為し得たと思うので、末尾に録して、絵図対照表と共に参考に供した。

詞・絵を三本校合することによって、元来の絵巻の成立、形態、作者の意図、対象とした読者を推定し得たと考えるが、美術史・農耕養蚕技術

史の何れにも昏い筆者には全ての解明については心許ないことである。

一 各絵巻の特徴

一、史料本 一卷 紙本著色 卷子装 縦二八・七糎 横約四八糎前後
(各料紙)

題箋は「たはらかさね耕作絵巻」 巻頭は「たはらかさね耕作」

詞書は、巻頭表題の次行に続けて二十三行あるのみで、巻中に一字もない。筆蹟は大きく抑揚あり、「堯・舜・耕作・延喜・天曆・鶯」などに漢字を用い、女性を対象としたかのような「織図」を欠き、読者に少年武家を想定しているように見える。絵の上下には大きくやり霞を引き、家屋・樹木などにて、場面をそれとなく区切り、詞書を持たないまま、自然な連続画となる。三本に共通する「序」と、同じく共通の第一段の詞書の終りの「耕作の心をすゝめ侍り、是を土牛の祭と名づく」を、「是を耕作のはしめとして、たはらかさねと名づく」と縮め括弧で替え、後に続く全ての詞章を省き、絵の序文として全体を説明したかのようにつくろい、あとは絵のみにて説明しているようであるが、第一段の「土牛の祭」の詞書で終わっているため、不自然なものとなっている。絵の場面は、稲作のみを主題としたと見え、麦刈・麦打の図も、養蚕の場面などは欠落している。他の二本と異なる古い形態の絵の粉本によつたのか。他の二本より類推すると、十二段の中の、第二段以下を故意に落したか、或は残存する、ありのままの粉本を連続するようにつないで描き、詞書も完全に存在しなかったたので、新たに序のみをまとめて、巻頭に付けたものだろうか、疑問は残る。

二、柳本 上・下 二巻 紙本著色 卷子装 縦三一・一糎、横約四七糎
(各料紙)

題箋は「たはらかさね」上 (下) 巻頭に題なし。

詞書は上巻 約二三六行、下巻 約三一〇九行あり、漢字・仮名(変体仮名を含む)交りにて書かれ、漢字は、「國・民・御世・家・也」など、幼童でも知るべきものに限られているようである。また所どころに濁点を付け、稀に名詞に振仮名を付けている。料紙はほぼ横四七・八糎で、多少の長短があるが、一定しており、それ故か、各段の終末の行は散し書き風に書き、余白を美的に調節している。そのため行数は正確には数え難い。

絵は各詞章の行事説明の終る所、即ち一段の終る所に描かれ、一種の絵本となっているのは、通常の絵巻物と同様である。また見せ場となる第七段「田植の図」が欠け、代りに、第九段「田草取の図」で補い、その跡の第九段には、第十段「豊稔見分の図」を挿入して、一種の変造をしているのは、当初より欠けていたのではなく、長年月の間に、表装がばらばらに解けた結果、逸失した果ての処置であったか、或は絵を抜き出し、独立した「田植・田粟の図」として表具、鑑賞したものか、その何れかであろう。「田植の図」の比較が出来ないのは残念である。

「養蚕図」は上巻末の第六段にあるが、最末が絵で終ることを、美的感覚より嫌ってか、詞章の中間、最終行より二十行以前を切断して、挿入したもののように絵があるが、詞書最後の段の初行の頭に、「さて」があることによつて、異和感が減少するが、絵との行間に余白なく、窮屈な感は免れない。尚、福岡本はこの間の詞書は連続する。これは柳本が改装の時、故意に変更されたことを示しているのだろう。

三、福岡本 上・下二巻 紙本著色 卷子装 上巻 縦三一・七糎、横全長八〇・二九糎 下巻 縦三一・五糎 横九三・六糎、(各料紙 横の長さ不定)

題箋は「俵かさね」上 (下) 巻頭に題なし。

詞書は、空間の大きい三ヶ所を除き、散し書きはなく、最後の行間を

程よく空けて、絵につないでいる。行数はほぼ柳本と同じである。

第一段に、他の二本にはある年頭豊作予祝の生きた牛による「荒起しの図」||土牛に当てた図がない。絵の中、詞書にはあり、柳本にある麦刈の図中に描かれた、童の「青草刈より帰途の図」がなく、「養蚕の図」中、柳本にある、結綿を運び、布を計る場面が欠けている。また「取入の図」に、稲刈の場面がない。最後の「倉入の図」に、土豪・百姓、或は給人の家の景を意図したのか、他の二本にはある中門や塀がない。

以上、史料本・福岡本・柳本の三本を概観して、要約すると、福岡本・柳本は全くと言いつ得る程に、詞書を同じくし、即ち詞書の親本は同一であり、両本を合せて、その筆者の脱字・衍字・短絡・誤記などを訂正、且つ修成すれば、原作者の作文をほぼ完全な詞章に復原し、成立の先後を決定し得ると考える。

絵画の部に於ても、福岡本・柳本は詞書と同様の関係にあるが、詞書ほどには合致せず、祖本を特定することは出来ない。数多くの粉本、速写・縮写本などを原本として合成し、且つ筆者が同一人ではなく、時期も同じではなく、農事に疎く、写実に習練のない絵師の筆になったもの、即ち詞書の筆者も異なり、絵師も異なると考えるが、史料本を加えて、三本を比較すれば、最初の製作者の意図、絵画の在り様が把握し得るのではなからうか。それにしても、史料本が他の二本より離れ過ぎていようと思われる。

不思議に感ぜられるのは、柳本・福岡本の詞書に、文辞の書入れ、抹消などの訂正の跡が全く見られないことである。完全な清書本（例えば、禁裏よりの将軍・大名等への下賜・贈答品）を意図して、同じものが、詞書・絵が各別に作られ、各段・各章の筆写の完了後、それぞれの段の最上のものを張継いで表装した、その清書本の完成後の数本の中

の、選り残りの中の優良品ではなかつたらうか。

三本の絵の優劣を論ずれば、史料本は複写であるとしても、人物の表情にめりはりがあり、雄勁で古体を存し、最も優れている。この場合、室町末期〜寛永初期頃に成ったと言いつ得ようが、手のたつ後代の絵師の、各段の絵を連続させた模写、筆蹟の模写も全く考えられなくはないが、一応、慶長頃の作と考えるのが妥当ではなからうか。

二 絵巻の構成

この絵巻を概括すれば、序章があり、続けて第一段より第十二段に分割して構成され、各段に絵が挿入されている。年中行事を十二箇月に配して解説する、日本文芸史上、普通に見られる形式である。仍て各段を略述すると以下の如くなる。

序章

天皇の仁政・撫民。中国古代の堯・舜、我朝の延喜・天曆の治のよう
な良い政治が行なわれれば、民豊に、貢物が絶えず、家々が繁昌する。
「豊に治まる世の中也」で、序の部は終るが、明確な段落がなく、詞書
は続く。

第一段 「正月」 立春・勸農||土牛の祭

「先づ立春の初めには」から始まる。史料本・柳本は正月の農作予祝の「田の荒起し・代掻・田植」の神事の表現で、壇は梯形に盛った土砂、そこに土地神が勧請された聖なる土で、注連縄で囲い、神を祭り、この盛土を唐犁ですく所作をして、勸農の意を表わし、豊作を祈る。貢物の絶えざること触れ、年貢収取の立場より説いている。郡奉行・代官・庄屋が記され、近世初頭を想定させる。

詞書に言う中国の農事の始まり、春、門外に土牛を祭ることを具体的に知らなかった作者・絵師は当時現行の日本の行事より考え、生きた牛に唐犁を牽かせたのである。当時各地の神社等にてなされていた予祝の儀式を描写したものだらう。漢画の「耕作図」にはない場面である。この壇は現代にも行なわれる、工事初めの鍬入れ式の盛土に対比出来る。柳本は注連縄が省略され、門側に唯二本の幣が立てられ、反対側に赤地錦の如き覆いをかけた机が置かれ、祭主の存在があいまいとなっている。福岡本は他の二本の、門外の子祝の「田の荒起し」がなく、第二段の春社の祭式より類推したと思われる同様の光景が描かれている。福岡本の親本には、土牛祭の図が欠落していたものと思われる。

尚、史料本は、侍の服装が古風で、袴を長袴の様に丈長に着用し、肩衣も古風に着なしている。柳本の侍は肩衣の前を交叉し、史料本に近いが、福岡本は肩衣の肩がより張り気味で、前の交叉は浅く見える。

第二段 「二月」 春社

ここでは丁酉の日(中国の行事の戌の日ではない。)に、中国の農書によったものであるが、中国の農耕年中行事の春社の説明に始まり、中国古代の土神・稷神(農耕の神)の伝説を語り、天候良く、牛馬は元気で、蚕も順調にと、五穀の豊作を祈念し、「俵の上に俵を重ね」、「君の年貢に未進もなく」、家内安全・子孫繁栄を祈ることを強調している。ここにも年貢収取者の立場を見る。詞書に忠実な柳本の、第九段にあるべき「田草取」には土竜が描かれているにも拘らず、第二段の詞書に「うくろもち」の句が欠けているのは短絡したものと思われる。

福岡本は、第一段のと合計して、朱鞘を差す者が三名もおり、朱色に對する絵師の感覚、好みが強く出ているが、江戸時代、元和九年・寛永三(一六二六)年と発令された朱鞘の帯用禁止の規定は生きており、儀

式には黒塗鞘が慣例の時代には、不適當である。

第三段 「三月」 灌漑・苗代

本朝の耕作の故事として、聖徳太子の治水・灌漑を語り、その方法・用具を述べ、撥釣瓶・龍骨車にも触れているのは、中国の農書によったものである。主題は「苗代」である。柳本のみには、詞書にある坎樋の樋門が描かれている。

第四段 「四月」 牛の成育・青草刈・麦刈

『王禎農書』の「牛耕起本」・「養馬類」・「養牛類」には、牛の重要性が強調され、「今農家以牛為本」とあり、日本では、関西・近畿は牛耕が大方なので、作者は牛の大切な事を説いたのであろう。詞書に忠実な柳本のみは、青草刈に、黒牛二頭と笛を吹く牧童を描入れている。ついで麦刈が語られる。史料本には「青草刈」・「麦刈」共に欠落している。

第五段 「月」ノ記入ナシ 麦打・麦搗き

本来、第四段に続けて差支えない図であるが、「さて、刈入れたる」と行が改まり、詞書を分割し、唐(穀)竿による麦打ち、麦搗きを描き、麦搗歌を録し、「俵に入れて積みたるは、いとにぎやか」と結ぶ。十二段の構成を意識したものであろう。史料本には前段同様麦の行事は全くない。

第六段 「月」ノ記入ナシ 養蚕・機織

農間作業として、伝説と共に、二月午の日に始まる養蚕・機織が説明される。楼瑋が描いて一般化した「耕織図」の中の「織図」が挿入されたものと考えられる。ここでも「国の貢や君の為」と絹織物の上納が悲しげ

に語られる。女性の読者を想定しているように思われる。史料本には「織図」は全くない。

第七段 「五月」 田植

「梅雨」に入り、水田耕作が中国の故事による牛の苦勞への同情と共に語られ、半夏生の田植に、近江の国風歌が採録され、倉に俵が「積みも重ねん」、「一粒万倍」が田植踊の歌謡として記録される。ここでは、丹波の国風歌が録され、作者の京附近の人なることを示している。柳本には、近江・丹波など西日本の方言「うら」||一人称が、丹波の方言として記されているが、福岡本では「われ」と標準語化されている。田植踊は漢画ではなく、史料本では踊り手が三人全て童である。柳本には「田植の図」が欠落し、代りに「田草取の図」が挿入される。他本と比較出来ないのが残念である。

第八段 「六月」 日照り・灌溉・雨乞

日照りの対策として、灌溉するのに、振り(投げ)釣瓶・水車(福岡本・史料本ナシ)・龍骨車などが語り描かれる。ついには雨乞の行事となり、請雨経読誦など神仏土俗の祈念が行ぜられ、『中臣能宣卿歌集』の請雨の歌も採録されている。風流傘踊りが興深く描かれるのは三本共通する。雨の降らない時の理由に、笛の音の「日好りく」、太鼓の「照れつけく」が笑いを誘う。

第九段 「月」ノ記入ナシ 田草取

炎天下の、三番にわたる田草取りの苦しみを、蛭の害と共に語り、その苦しみを忘れるための歌謡を記す。柳本は「田植」にまわされた「田草取」の図に代えて、蛭の害を説明する詞書を分断して、無理にも、紅

葉樹のある「豊稔見分」の図を挿入する。

第十段 「月」ノ記入ナシ 豊稔見分

風害・蝗害を説き、中国の故事を挙げ、仁政による豊稔を語り、郡代・代官等の義務を論ず。柳本には、第九段へこの図を充當した跡に、挿入するものがない。

第十一段 「月」ノ記入ナシ 稻刈・取入・俵詰

秋の収穫作業の多忙・喜びが主題となる。詞書には、裏作の麦蒔が周到に記されてもいる。ここでも、俵が「稻倉に重ね上げく、積み上げたるは、まことに万の宝というとも、是には勝らじ」と「大福徳の長者」と讃えている。ここにも、段落に迷いがあり、柳本・福岡本は麦刈の図がある故にか、同様の事とされたらしく、稻刈・牛馬による搬入図は省略されて、二紙にわたる筈の図の、前半の一紙分を欠いている。史料本には連続する絵として描かれている。稲扱きの場面の扱箸の明確な描写のないのは、あまりに農事に疎く、当時現行の千歯扱きも知らず、廃された扱き箸も知らないため、無知のまま、粉本をなぞったからであろう。

第十二段 「月」ノ記入ナシ 検数・倉入れ

世の中平安にして、豊作となり、「地頭・代官・給人」が俵を数え、年貢を受取り、倉に入れる。福岡本には中門がなく、土豪か給人の屋敷のようでもある。「俵の数は限りもなし、打重ねく、積み上げたる」と前段にも増して喜び、酒肴を振舞い、「君は千代ませく」と祝い「農人は家に帰って、越冬迎春の支度も十分で、年忘れの遊びも打揃って行かない、「君の恵みを仰ぎ楽しむ御代」を強調して完結する。終末に、立

春・睦月と書き入れ、来春の行事に連続する事を暗示する。

「猿曳」が福岡本にのみ登場する。この猿曳は通常の猿曳に較べると異常なのは、袴を着けないが、黒の五つ紋の羽織を着していることである。喜田川季莊の『近世風俗誌』によれば、通常古手巾をかむり、袴衣を着し、二尺ばかりの竹を携えるが、大名等に召される者は羽織袴を着すとある。正・五・九月には、年中行事として、既を持つほどの大名・大身の武家に入入りし、既祈禱を行なう。それは日吉山王の使であり、既の守護神とされていたからである。絵師はこれらの事を関知しなくても、「耕作図」中の猿曳を先蹤として、描くに、武家出入りの際の礼服として着用させたのであろう。猿曳が礼服として羽織を着用したのは、いつの時代か確証はないが、『翁草』⁽¹³⁾三九には、享保十三年四月十二日、將軍吉宗は日光社参発途に、黒緞面の紋付羽織を着用しており、『同書』一四五の説には、十八世紀前半には、民間にても着用しているようである。従って、のちの寛保年間に、猿曳が着用したとしても大過なからうと考える。梅鉢紋を据えた理由は推量しがたい。

以上を概観すると、農作業を年中行事として、なるべく十二月に割当て、十二段とする。その結果、挿画には、その挿入箇所迷った跡が見え、それが詞書の分割にも現れている。

三 詞書の検討

一、その内容

冒頭に、「我大君の政正しく」と書きはじめ、天皇の仁政を根本に置き、延喜・天曆の治政・太子伝説を中にはさみ説くことにより、公家方による製作であることを示す。中国の古代の農事を説くのは、漢画の「耕織図」が下絵として想定され、中国の農書をはじめ、『論衡』明雲第四五・『史記』孔子世家・『礼記』月令編・『漢書』芸文志等、多くの中国古典

による、相当の学殖を銜つてもいるが、直接的には、訓蒙の書『蒙求』に採録されている「魯恭馴雉」の例がある。人口に膾炙されている話題も多い。また「郡奉行・代官・給人・庄屋」を記すことにより、室町末期～近世初頭の成立を思わしめる。また五穀、中でも稲については、晚稲・粳稲などに触れ、養蚕（起伏、三眠）・機織をも語ることで、農事に深い関心・知識のあることがうかがえる。治水についても、中国の「農書」の知識を示し、耕作の諸事（石亀・鳥・田螺・風害・蝗・日照り・秋雨の害、鳴子・青草刈（刈敷草）など）を説き、『王禎農書』の畜養篇を踏まえ、馬には触れず、牛の生育、労働に慈愛を説く、また近江・丹波の民謡を記すのは、京都近郊の農事に詳しいことを示しているのだろう。また麦（かちかた・大麦・小麦・麦搗歌）の裏作についても、一通りの知識があるようである。日照り・灌漑・雨乞の祭（各種の宗教行事・中国の祈雨詩・和歌など）についても広い知識を持ち、田草取などの労苦について深い理解を示し、仁慈を説いている。その労苦と仁政の結果が豊作となり、年貢の増収となることを繰り返して説いているのは、鑑戒が主体の絵物語・絵本であることを明確にする。

二、その書風・写字清書の有り様

主として平仮名（変体仮名交り）で書かれており、作詞者の原文を、能書家が依頼されて清書したものの故、文章に不自然には見えない短絡や、省略もあり、思いこみによる誤り、「ためし」と「いにしえ」の書違え（第九行と第十一行）、衍字（第四三行の山）、こ・か、う・そ、り・る等の曖昧さ、誤記、助詞の脱字、歌謡の句の脱落がある。

清書者は、文字を優美に書くこと、字配りに専念し、意味は二の次となり、行替えには、開いた仮名に漢字の意味上の続き工合に拘泥しない。書と絵は別途に書かれた後に、合成表具されたと見え、柳本は段の

終りを散し書き風に書いて、料紙を途中から切断して、余白を縮めることを避けるよう努めており、福岡本は散し書きもあるが、料紙本来の長さではないところがあり、切断、接続して、その配慮はないように見える。全体に朗読する児童・侍女を意識してか、春社の「やしろ」、修法の行の「おこなひ」など、大和言葉化がはかられており、福岡本は柳本より、より平易に仮名書きの部分が多く、人名・職名が平仮名で記されている。その反面、柳本には濁点が打たれ、読みやすい。また前述のように、丹波の国風に、自己を指す「うら」が「わ(が)」に共通語化されてもいる。

四 挿画の検討 その写実性について

史料本については、先行の高柳・松島・久野氏等の論考⁽¹⁵⁾があるので、要点のみを記すと、漢画風大和絵とでも言うべき描法で、風俗も大方写生風であり、人物の面貌も格調高く描かれ、探幽以前の画風をよく示しているという⁽¹⁶⁾。馬は駄馬ではなく、殊に柳本・福岡本のは武家乗用の立派な芦毛・青毛などであるが、駄馬用の一本手綱を曖昧ながら描いている。牛は漢画にある江南の水牛ではない。詞書にいう土牛はなく、壇は梯形に盛った土砂である。これは漢画にはなく、日本の土俗を写したものである。祭式に蓆も敷かない土下座は気にかかるところで、婦人の中には、髻に中国風のものが交じる、鍬・鋤については、写実から程遠く、文字を絵に替えたに過ぎない感がある。簀(あじか)・杓(おうこ)については、棒の先端近くにある臍に、つり紐を交叉してひっかけ、荷重により、紐が緊張して、はずれない用意が全く見当らない。史料本の、土製の唐臼を多人数で廻す把手に、天井よりの紐がないのは、回転に均等に力をかけるに必須の用具故、線を見落したか不用意である。水車(筒車)は文様に普通に描かれる片輪車風に変形している。理詰め

推理もなく、最も適当しないのは龍骨車である。大方の耕作図の龍骨車に見較べて、あまりな描き方に不審を感じ、龍骨車自体を空想の所産と考えた時もあったが、ホンメル⁽¹⁷⁾の記録等をも引用した、ニーダムの写真・図を附した詳論を見て、用水路の勾配が極少の江南地方の運河水田地帯で唐宋の頃から普及し、日本にも入った、槽の形態が筒ではなく樋であって、傾斜角も二十四度以内の緩やかさで、その揚水効率の低さをも知り、古島敏雄・吉田光邦氏の解説もあり、日本にも近世初頭にあったが、のち踏車にとって代られたことも納得した。史料本のもものは、堤と流れの際にあり、決定的に不可なるのは、側面の樋の板を欠く事である。挺子の原理によるベタルも、大きな歯車も無視されている。これ程不合理なものを描いたのは、よった親本が、速写・縮写などで漠然としていたか、絵がすりきれていたものだろうか。不明確であったか、面倒であったか、史料本には、耕作図には必ずある日照り対策の、ベタルの上の日覆いの屋根が、やり霞で隠してある。揚げた水の流路も全くなく、いきなり田に入れる事も不可解であり、落下する水による、畦の崩壊を防ぐ蓆で覆う備えもない。振(投)釣瓶(水替桶)の描写も、是亦不正確で、堤・畦の崩落防止の板・蓆などが無い。これは今も、東南アジアのドキュメントには見られる。描き方によっては、絵画的風情もあるだろうに、いささか無神経である。蓆は漢画にも全く見えないので、当然描かなかったのだろう。

柳本の唐竿打ちの女五人、全員が左利きなのは不思議であるが、興味あるところで、絵師が全く無知か、親本の画面を反転したまま、左右の手を描き変えなかったのだろうか。

三本に共通して言えることは、稲扱きの形態は紛れもないが、扱き箸が全く見えないことである。柳本のように、それを扱き箸とすれば、稲藁のように見てとったのだろう。福岡本・史料本は、穂を手でしごいて

いるように見えるのである。

翻って、絵師自体を考えてみると、主題は農事であるのに、絵師にその農事に対する理解がまことに乏しいのは不思議でさえあるが、粉本模写を繰り返すのみの絵師には、自然観照の習慣もなく、知ろうとする意志もなく、作詞者との接触もなかったものだろうか、若しあったとしても、作詞者も文献的知識のみで、現状には無知であったものだろう。当時の写生については更めて別に考えてみたい。

柳本・福岡本は詞の殆んどを仮名書し、登場する児童の数を増し、遊戯を描写し、田楽踊は童が演じ(史料本)、或はまことに拙劣ではあるが、亀・蛙(福岡本)・土竜(柳本)を不釣合に大きく描写し、梅鉢紋付黒羽織の猿廻し(福岡本)に猿を描きだしたのは、先行本があるにしても、直接には、幼童の心をひきつけ、飽きさせず、文字を憶えさせ、在所から遊離して、無知となった武家の子弟に、主たる収入の年貢、米麦についての知識を、或は農民の年中の苦勞、また為政者としての、農民撫育を教諭しているようである。

以上三本の絵を総括すれば、史料本は河野通明氏の説の如く衣服に文様が全くない事よりも、祖本を元に、早い時期(近世初期)に、技倆のある絵師が、各個別の粉本挿画を忠実に、白描で模写し乍ら、各場面を風景・家屋・樹木・やり霞などで仕切り、つなぎ、彩色したもので、詞書全部を写すのが、絵師にとつて写字は不得手で、面倒を嫌い、序章・第一段初めを筆写し、縮め括ったもの、であると考ええる。祖本は、二つ玉の算盤のある事、面貌・風俗に古体の存する事などより、慶長年間を下らぬもの、とする先学の高説に従いたい。史料本は強いて言えば、少年武家のための鑑戒として、主たる年貢の米を作る農民の艱苦、収穫の喜び、即ち領主の喜びを記した、女子教育の意味もある「織図」を全く

欠いた、武家用の絵巻のための粉本としたものだろう。田植踊りの童は少年を対象としたものとも見られる。

柳本・福岡本は史料本と全く画風が異なり、農事の実解を理解せず、崩れ果てた、反転写をも含む各種の粉本の吹き寄せのようなものによつたとと思われるので、江戸時代も中期以降、全く家元化した御用絵師の手になるものと推測する。

内容が鑑戒・教育的なことより、前項に読者を想定したが、福岡本を見ての連想の末、想到した一つの仮説を以下に述べる。

五 狩野(鶴沢)探鯨画の耕作絵巻

寛保三(一七四三)年の、武家伝奏久我通兄の日記によれば、將軍の使者として老中土岐丹後守頼稔が上洛、二月十六日参内した。その時頼稔へことづけて、禁裏より將軍吉宗へ『名所図巻物』土佐光芳画之一巻・『五十首和歌短冊』打疊泥絵が下賜され、世子家重(当時三十三歳)へは『新勅撰和歌集』二冊・末広 土佐光芳画 五本が、嫡孫大納言家治(当時七歳)へは『耕作図巻物』法橋探鯨画二巻が下賜された。同様に准后盛子より、吉宗へ『伊勢物語』二冊、家重へ『六歌仙手鑑』一帖、家治へは『百人一首歌類多』が贈られている。嘉例によつた公武に通常の、文学的な、相手を勘案した贈答品で、歌類多は七歳の童児には相応しい品である。それならば、この『耕作図巻物』もやさしい童児用絵本であるのが相応しかろう。これを主題の「俵かさね」に当てたいのである。唯、名称が「耕作図絵巻」とあるのみで、内容については記すところがない。いわゆる「耕織絵巻」各一卷でないことは確かである。勿論、「耕作」即ち「俵かさね」とは断定し難い。併ら、筆者には、この「俵かさね」と同様のものが、卑俗な呼称を避けて、壮重な漢画の慣用の名称で、未来の將軍への贈り物に相応しいものとして、目録にはそう記さ

れてあったものと考えたい。大納言とはいえ、まだ七歳の童児、この「俵かさね」は、内容が乳児・童（幼児から少年少女）の乳飲み・大人の手伝い・子守の所作、喜々とした遊びなど、その人数の異常な多さ、猿曳に猿・蛙・亀・鶏雛・牛・馬などの面白さに興ひかれ、仮名に親んだ傳育の女中らに読みとかれ、絵解きされ、うなづく姿が想像される。そのうちに、自己の将来、治政のあるべき姿を覚ったものであろう。將軍嫡孫へ、或はまた大名の幼児に、一種の児童用絵本として製作され、立派に表装して贈られたものだろう。

それには禁中に製作責任者がおり、絵はマンネリ化して、拙劣ではあるが、絵所預土佐光芳（一七〇〇〜一七七二、当時四十四歳）に拮抗する京狩野派の重鎮、鶴沢派の頭領御用絵師探鯨²⁴に担当せしめた。当時、探鯨は法橋の地位にあつて、年齢は五十四歳くらい。狩野探幽の直弟子探山を父に持ち、絵は父に学ぶというから、狩野探幽から継承した「四季耕作図」²⁵などの狩野派の粉本も多く持っていたことであろう。従つて探幽の猿曳も翻案されたものであろう。但遺憾なるは、当時鶴沢探鯨が如何なる絵を描いていたか、検討すべき資料を持たないことである。後日に期したい。

詞書は能筆の公家、或は門跡などへ命じ、絵師・書家両者に同じものを何枚も筆写・複写せしめ、絵・詞書共に中で最も優良なもの、誤写・脱字もないものを選び、組み合わせる表具し、最上のものを選び出して、將軍家への贈答品とし、二番手以下を、その折々に、大名家などへの答礼品とし、その一本（福岡本）が松浦家へ渡つたものではなからうか。或は、これが將軍家より、後代下賜品とされたものだったのだからか。またその中の一本が柳本で、前代までの、或は次代以後の青少年を対象とした品か。福岡本では、土牛の図が土俗の予祝の「荒起しの図」になつていないので、柳本に直結した関係ではないと考へるので、疑問が残る。

尚、綱吉の長かつた文治政策に、漢・儒の学が広く公武の間に浸透し、絵巻物にも教育的な大きな影響があつたものと思われるが、書も絵も稚拙であつた將軍綱吉筆とは信じ難いが、久能山東照宮所蔵の「四季耕作図」である「稼穡図屏風」²⁷はそのように伝承されているとのことである。これも江戸中期にかかる文治的な雲田氣を伝える話である。

むすび

先学の諸論考を集約して、筆者なりにまとめれば、「耕作図」は、日本に於ては勸農Ⅱ農書としての用意よりは、観賞絵画として、舶載された異国情緒溢れる漢画の中の風景画であり、屏風絵・絵巻として愛好され、さかんに製作された。それが大和絵として、不十分ながら換骨奪胎されて、中国の「土牛祭」が、日本の豊作予祝の「荒起し・田代搔」の行事に、また土俗の田楽踊りが附加されて、日本の田園風景として描かれるようになった。史料本はその先駆的なものである。

これら耕織図は、日常の生活の場が京都集住の公家（禁裏絵師も含まれる）、在所より隔離されて、城郭内に定住した上層武家にとっては、全く住む世界が異なつてしまつた農村社会を、物珍らしい農耕年中行事として、遠く眺める眼によって楽しまれた側面を持つ。また身近に子弟を引きつけて、鑑戒の資料とするには、日本の風俗を描く大和絵、風な絵巻が相応しかつたと考へる。

詞書は農耕を他人事と見ることを自戒したかのように、農事に関する机上の教育と、為政者としての鑑戒に終始し、年間を通じて時を違えぬ自然相手の農民の労苦を知り、農耕神の加護を祈り、耕作を助ける牛をもいたわる農民に仁政を施せば、その結果豊作となり、年貢に未進もなく、倉入りの俵が重なり、めでたい春を迎えられると功利的に説いてい

る。

作詞者は、目下のところ、その祖本の如きものも見当らないので未詳であるが、漢儒の学に詳しく、全てにわたって博識で、知識人には常識の『蒙求』をも参考に、上層階層の子弟の訓蒙を意図して、平易を心がけて製作した絵本であると言い得よう。

強いて、作者が対象とした読者層を考えれば、織図がなく、漢字の多い史料本は、武家少年用の粉本。また柳本・福岡本(旧松浦家本)は、旧蔵者によらなくても、一見して、いわゆる大名もので、仮名の多い柳本は上層武家の幼年用、より読みのやさしい福岡本は、將軍・大名の幼児教育用に製作した絵本の中の一本であろう。

以上の経緯より類推して、福岡本の挿画の筆者を、禁裏御用絵師法橋狩野探鯨、寛保三年製作の清書本(本絵)中の一組と推す。柳本については、それ以前の同派の絵師の手になるものかと考えるが、第一段の「土牛の祭」の絵が異なる故、判断しかねる。詞書の筆者については、同一人とは思えないが、年齢の経過を考えると断定はためらわれる。

これら一連の大和絵風『たはらかさね耕作図』は、渡部武氏によれば、漢画「四季耕作図」・「耕織図」が狩野派・雲谷派等に引つがれ、狩野一門によって伝承された漢風・和様の耕作図が、橘守国(一六七九—一七四八)によって、「四時農業図」「絵本通宝志」(一七二九年刊)や「蚕家織婦之図」「絵本直指宝」(一七四四年刊)が和様化されて板行され、絵師の手引書、絵手本・種本とされ、大いに流行しており、また他に、石川流宣(一七〇〇年頃)の『大和耕作絵抄』(元禄年間刊)などがあり、また一方、実用の農書である、宮崎安貞(一六二三—一九七)の『農業全書』(元禄十年刊)に板行された写実的な挿図があつて、互に影響していた。⁽²⁸⁾その中であつて、それに抗するように、継承した門外不出の粉本によってのみ描かれたと思われる絵巻が、公武の極く上層のみに細

々と流通していたのは、まことに興深い事実と言わねばならない。受け入れた禁裏も、贈答された大名等も、その現実に遊離した生活をしていいた故に、絵図の不都合・不自然さにも気付かず、幼少年の一時期に、賞玩したものであろう。その奇麗な保存状況から、下賜品として、また將軍・大名等の幼少の手沢本として、大切に格納されていたものである。従つて、この「たはらかさね」は「耕織図」中、公武上層のみに伝来した稀少な和様の一系統と云うことが出来よう。

附 科学技術史上の農具としては、これら三本に描かれた農具は、あまりにも現実の農具を知らない絵師の手になる故に、正當に評価することは出来ない。その中でも、日本史の数多くの教科書に描かれた龍骨車、中でも史料本によつて起した挿図は廃して、正確な資料によつたものに差替えるべきであらう。

(註)

(1) 「たはらかさね耕作絵巻」東京大学史料編纂所蔵 架番号 貴〇〇八〇

(2) 「俵かさね」 上・下二巻 福岡市博物館蔵 福岡市博物館建設準備室 収蔵品目録 3 昭和六十年購入

(3) 『田園風俗画』図録 4 俵かさね耕作絵巻(福井尚寿概説) 佐賀県立美術館

(4) 「俵かさね絵巻」 風流踊図 東京府伯爵松浦厚氏所蔵 東京大学史料編纂所 架番号五九八—八四七一 昭和三年五月撮影 四切

(5) 「たはらかさね」 上・下二巻 京都柳孝氏蔵『太平記の世界展』図録 二〇二 俵重絵巻(内田啓一解説)

(6) 高柳光寿 たはらかさね耕作 — 農耕に関する絵巻の研究 — 日本歴史 三九 昭和二九年

(7) 『高柳光寿史学論文集』上 吉川弘文館 昭和四五年 松島栄一 たはらかさね耕作絵巻解説 『農具便利論』 — たはらかさね

耕作絵巻(抄)』(江戸科学古典叢書 四) 昭和五二年

(8) 久野幸子 四季耕作図屏風 — 中国耕織図から久隅守景まで — 『美学美術史研究論集 三』 名古屋大学文学部美学美術史研究室 昭和五九年

(9) 渡部武 『中国農書「耕織図」の流伝とその影響について』 昭和六二年三月 詞書出典についても多くの御教示を得た。記して謝意を表す。

(10) 河野通明 「たはらかさね耕作絵巻」の基礎的検討 レジメ(戦国・織豊期研究会) 平成三年十二月
このレジメは渡辺雄二氏の御厚意によった。記して謝意を表す。

(11) 『王禎農書』 王毓瑚校 一九八一年十一月

(12) 『近世風俗志』 守貞漫稿 喜田川季荘(一八一〇?)の随筆。天保八〜嘉永六年成立。

(13) 『翁草』 神沢貞軒(一七〇九—一七九五)の随筆。京都の人。安永五(一七七六)年の序あり。

吉宗の行装についての原史料は、目下管見には入らないが、この記述は信じて可ならん。

(14) (11) に同じ。

(15) (6)・(7)・(8)・(9)・(10) に同じ。

(16) 絵については鈴木廣之氏の高教を得た。記して謝意を表す。

(17) R. P. Hommel "China at work" 1937

(18) J・ニードム 龍骨車およびロザリオ式ポンプ他 機械工学(下) 『中国の科学と文明』 九 一九七八年十月

(19) 古島敏雄 『日本農業史』 岩波全書二二五 昭和三二年 農業 『日本科学技術史』 朝日新聞社 昭和三七年

(20) 吉田光邦 揚水用水車 『機械』ものと人間の文化史 13 法政大学出版局 昭和四六年

(21) (10) に同じ。

(22) 『通元公記』 十九 寛保三年 宮内庁書陵部蔵

(23) 土岐頼稔(一六九五—一七四四) 宝永六年三月従五位下、丹後守。正徳三年七月襲封、享保十九年六月京都所司代、侍従。寛保二年六月老中。七月上野沼田城主。延享元年九月歿。年五十。〔寛政重修諸家譜〕卷二十九

二)

(24) 狩野探鯨(?一七六九) 名は守美、鶴沢担山の子、鶴沢派二世、禁裏御用絵師、法眼に陞る。旧明眼院障壁画(現東京国立博物館蔵)は代表作。明和六年八月廿一日歿。八十余歳。仁齋院彩誉花隠居士。京都二条川端善導寺に葬す。「扶桑画人伝」・「日本画家辞典」・「京都大事典」。詳細は未調査。仮に八十歳とすると、元禄二(一六八九)年頃の生れ。

(25) 狩野探幽筆「四季耕作図」 六曲一双 紙本淡彩 寛文十一年作。

(26) (25) に同じ。

(27) 『稼穡図(耕作図) 屏風』 伝綱吉筆 六曲一双 『徳川將軍家の名宝展』 図録 昭和五八年八月 久能山東照宮

(28) (9) に同じ。

〔後記〕

この論考のための調査につき、御高配、御教示給わった、御所蔵の柳孝氏・福岡市博物館・東京大学史料編纂所、并に 東京国立博物館・東京国立文化財研究所・佐賀県立美術館・早稲田大学教育学部図書室、池畑裕樹・柿沼徹・吉良國光・小宮陸之・鈴木邦明・中村敬子・廣井章久・又野誠・松原茂・村田安穂・渡辺雄二氏等に、記して御礼申し上げる。

尚、この論考は、東京大学史料編纂所第二二〇回研究発表会(平成四年十月十二日)に於て、「俵かさね耕作絵巻」考 — 史料編纂所本と新出の二本との比較検討を通じて — と題して発表したものである。

構 図 十二段 (各段毎の三本要点) 対照表

	福岡本	柳本	史料本
	<p>第一段 土牛の祭</p> <p>田の辺り</p> <p>土の壇(低、広)前 幣二・注連縄</p> <p>机上 花生に松一 供物二</p> <p>司祭者?白丁(翁)一幣を持つ</p> <p>侍(蓆に座る)肩衣九、朱鞘二</p> <p>田家の前 参列の女六童三乳児一翁一男一牛ナシ</p>	<p>同上</p> <p>門前</p> <p>土の壇(高、狭)前 幣二</p> <p>机赤地錦?の覆 灯明台一 供物二 器一</p> <p>司祭者?狩衣二 侍烏帽子二 肩衣八</p> <p>門下に座る侍二</p> <p>黒牛に唐犁</p>	<p>同上</p> <p>門前</p> <p>土の壇の角に幣四 注連縄を張廻らす</p> <p>机ナシ</p> <p>門下に座る侍烏帽子二(司祭者カ)</p> <p>侍烏帽子六 肩衣(牛遣共)二</p> <p>黒牛に唐犁 (各本 全員打刀一のみ)</p>
	<p>第二段 春社</p> <p>田の前 田家の横</p> <p>土の壇 幣二 注連縄</p> <p>机上 灯明台(点灯)一 供物三 台二</p> <p>司祭者?侍二(幣を捧ぐ)後に五肩衣朱鞘一</p> <p>参列の女三 童一 翁一 男一</p>	<p>同上</p> <p>田の前</p> <p>土の壇ナシ</p> <p>机上 灯明台(点灯)二 供物二 蓋物二</p> <p>司祭者?侍二 幣を捧ぐ 後に四 全員肩衣</p> <p>参列の女七 童一</p>	<p>同上</p> <p>田の前</p> <p>土の壇ナシ</p> <p>机上 灯明台(無点灯)二 供物二 蓋物二</p> <p>司祭侍幣を捧ぐ一 後に侍三 肩衣三 重箱</p> <p>参列の侍一肩衣ナシ 女三童一乳児一</p>
	<p>第三段 苗代</p> <p>水車(筒車) 蛇籠</p> <p>堤上に鋤担う男一 一服の男一 鋤鎌の男四</p> <p>粃蒔く男一 亀四 蛙六</p> <p>茶弁当を頭上に運ぶ女一 童二</p> <p>黒牛に唐犁を遣ひ鞭打男一</p>	<p>同上</p> <p>水車(筒車) 樋門 蛇籠</p> <p>老翁杖一 童一 種粃を担う男一</p> <p>鋤鎌の男十二 粃を蒔く男二</p> <p>茶を配る女一 童三</p> <p>牛・唐犁ナシ</p>	<p>同上</p> <p>蛇籠</p> <p>老翁杖一 童一 小手をかざし眺む男一</p> <p>粃蒔く男二 畦に休息の男一 鎌・鋤の男各四</p> <p>茶を配る小童一</p> <p>牛・唐犁ナシ</p>

第四段 麦刈

(青草刈ナシ 牛ナシ)

田家の前 夫婦?各一 乳児一 童二
麦束を枋にて運ぶ男一 頭上に運ぶ女一
芦毛牡馬(荷鞍付)麦束を背に進む(牽者ナシ)
麦刈男四

第五段 麦打

唐竿打(順手) 女六(対面) 童一(そのまね)
奥に麦干し 童三
田家の中 箕の女一 老翁杖一(紋付羽織)
燕三

第六段 養蚕

(段末にある)
岸辺 男一女二 桑摘む(立膝をつく)
籠を手に女一
繭を煮て糸を採る女一 糸を繰る女一
蚕棚(二室)に女三 童二
○下図の(柳本)の如き部分ナシ

第七段 田植

田植女四 代掻男二(鋤・鍬)

同上

(青草刈ノ附リ)

黒牛二 童四(内牛背に吹笛一)
馬(連銭芦毛、荷鞍付) 麦束を背に
童 一本手綱にて牽く
麦刈男三 麦束を枋にて運ぶ男一

同上

唐竿打(全て左利き) 女五(対面)
娘と媪 箕と蓆にて選別
田家 牛屋に黒牛伏臥す
麦搗き女二 立杵二 童一
麦扱き女二(庭の蓆上に)

同上

○行間を切断して挿入する
桑畠 男一女一 桑摘む(立姿) 籠を手に女二
桶にて手拭を絞る女一
繭(糸に誤解する)を煮る女二
蚕棚に女三
機織女一 絡車に糸を繰る女一
結綿を縁に運ぶ女一 其を見る老夫妻 童二
座敷 布を計る女一 対面する男一 童一

同上

○欠失してナシ

○ナシ

○ナシ

○ナシ

同上

田植女四(代掻男ナシ) 箕に早苗を運ぶ男

簀に早苗を運ぶ女一 童二

休む男一 子を負う女一

田植踊ナシ

第八段 日照のため灌漑・雨乞

(その一)

祠の前 風流傘踊 男十(笛一・太鼓一・

簀笠二・赤頭巾一)

見物の女十 童三 乳児一

(その二、続けて)

振釣瓶男二 龍骨車男三女一

第九段 田草取

田草取る女六 授乳の女一

川中に黒牛の背に童一 橋上茶弁当の男一

頭上に運ぶ女一 童二

第十段 豊稔見分

紅葉樹一

黒髪中老杖一 童一同行男六 鍬一 鋤一 童二

老松一

○田草取の図にて補う

同上

(その一)

龍骨車男三 振釣瓶男二 水車(筒車)

茶弁当を頭上に運ぶ女一 桶(汁カ茶)の童一

(その二、続けて)

神社の境内 風流傘踊 男九(笛一・太鼓一

・簀笠三(うち赤頭巾一)

見物の女七 童二 乳児一

同上

○欠失してナシ

○田植に代用し、跡を豊稔見分にて補う

田の草取る男一女四 授乳の女一 それを

待つ子守童一 鍬を肩に通行の男一

土竜二

同上

○欠失してナシ

○田の草取に代用す

「白髪翁杖一 童一 媪杖一 童一同行男四

紅葉樹一

田植踊 童のみ三(鉦・太鼓・手振各一)

授乳中の女 その笠を持ち待つ子守の童一

同上

(その一)

龍骨車男四(屋根ナシ、側板ナシ)

振釣瓶男二

(その二、続けて)

神社の前 風流傘踊 男九(笛一・太鼓一・

小鼓一・赤熊二・赤頭巾一)

見物の女四 童一 乳児一 烏帽子一 男一

同上

田草取る男二女四 茶弁当を頭上に運ぶ女一

桶(汁カ茶)を背負う童一

同上

老松一 枯木一

白髪翁一 童一 同行男五(鍬二)

第十一 段 稲刈・取入・糶摺・俵詰

(その一) 稲刈ナシ

(その二) 取入

枅に稲束を運ぶ男三

白馬黒馬一 稲束を積み牽牛童二 追う童二

黒牛一 稲束を背に牽牛童一

田家に女二 童二

第十二 段 検数・倉入 俵重ね

(第十一 段 その三であるべき図)〔前半部〕

稲扱(らしき動作の)女四 手伝童一

木白にて糶摺の男三女一 童一

箕・蓆にて選別の女二 俵を締る男一

俵を運びこむ男一

〔後半部〕

指図する侍一

猿一 猿廻し(梅鉢紋付羽織)猿を見る童三

同上

(その一) 稲刈ナシ

(その二) 取入ナシ

(その三) 稲扱ぎ・糶摺・計量・俵詰

稲扱女三(扱箸不明) 童一

唐臼男二女二 箕にて選別の媪一

計量男一 俵詰男二

鶏一番雛三

同上

中門の外 荷下し・検数・帳付

座敷 書記役人三

庭前 芦毛馬一 黒牛一 俵を下し運ぶ男六

中門の内

座敷 屏風を背に烏帽子侍二

縁側 烏帽子侍三

庭前 かがむ肩衣侍一 俵を運び積む男五

同上

(その一) 稲刈

稲刈男一女一

(その二) 取入

黒牛に稲束一 牽牛童一 枅に稲束の男一

翁一

(その三) 糶摺・俵詰

箕にて選別の媪一 唐臼男一女三 稲扱女四

俵詰男一 鶏一番

同上

中門の外 (柳本に同じ)

座敷 書記役・検数役人二(帳付・算盤)

庭前 かがむ侍一 芦毛馬一 黒馬一 黒牛童

俵を下し運ぶ男四

中門の内

座敷 屏風を背に祝の酒盛 烏帽子侍五

絵仕の児性一 縁に侍二

庭に指図の烏帽子侍一

俵を運び積む男三

「たはらかさね」詞書

例言

福岡本を底本とし、柳本を以て校合した。変体仮名は通常の仮名に改め、読点を附した。両本の相違する部分には、底本の左側に・印を附し、右側に柳本の字句、改行の「印を示した。なお、福岡本の改行は原本のまゝとしたが、散し書きの部分(三ヶ所)については、組版の都合上、前後に*を附して棒組に改めた。柳本の振仮名は便宜(一)で括弧で括って、その下に示した。尚、史料本の詞書は、高柳論文(6)・松島論文(7)を参看されたい。

(序)

それわか大君のまつりことたしく

(ナシ) 國 して・くにをめぐみ民をあはれミすくなる

道・みちをおこなはせ給へハ、五日の風えたを

ならさす、十日の雨つちくれをやふらす、

日てり・こう水・大風のうれへもなけれハ、

五こくゆたかにたみさかへ、万戸とほそを

さす、ミちに・おちしものをひろはす、とおく

もろこしのためしをとえハ、たうげう・くしゆん

の御世にひとしく、ちかくわかつてうのい

しへをたつぬれハ、えんき・てんりやくの

御代といふとも、今この御世にまさるへきや、

民・たミのかまどにきハひて、人みな五このたの

しみにほこれり、このゆへにくくのミツ

此 國々

皆一袴

のミツ

のミツ

のミツ

きものたゆることなく、い多の家々のはんしやう
時をえてゆたかにおさまる世の中なり、

(第一段) ○連続ス

まつ立春のはしめにハ、いけのひかしのこ

ほりとけて、まとのむめハ花ほころひ、た

にのうくひす歌こ多めつらかに、山のかすみも

たな引たり、りつしゆんのまへ五日に、とき

うをつくり、からすきをかけ、かうさくこのう

にんとも君門前

人をのくきみのもんせんにあつまり、

夜のあけかたにたんをかさり、とうみやう・く

もつをつくえにそなへ、こほりふきやう、さと

々代官村のたいくはん、むらくのしやう屋以下、き

らひやかにいてたち、たんをめぐり、(ナシ)牛

にむかひ、むちをとりて三たひうち、かう

にむかひ、むちをとりて三たひうち、かう

にむかひ、むちをとりて三たひうち、かう

にむかひ、むちをとりて三たひうち、かう

「土牛祭の図」

(第二段)

さてきさらきになりぬれハ、名こりの

雪ハさむからて、山のしたよりみなきりて、

谷・たにのこほりもとけわたり、花のつかひの

風のとかに、かりかねすてに羽をつくるひ

きたにむかふてかへらんとす、日のととり

の日にいたつて、つちをたかくかさねてま

つりをおこなふ、これをやしるとつくる世

むかし、けうこうしの子を后土となつく、み

たりになかるミつをおさめ、ふちにた

えて川をなかし、山とさと、くかと水と

えて川をなかし、山とさと、くかと水と

えて川をなかし、山とさと、くかと水と

えて川をなかし、山とさと、くかと水と

えて川をなかし、山とさと、くかと水と

をのくわかちおさめられたり、人みなこれをかんで、やしるをかまへて神とあかめ、まつりをいたして恩をほうす、又れいさん氏の子を棄と名つく、五こくを地にほとこしかうさくのつとめをなし、はじめて人みなををしへられしとかや、これを神にいはいひて、よくしんとなつく、又こうとの子をしゆくきんとなつく、うしにからすきをかけてひかする事、此人はしめてをしへられし、すへてしやしよくの神、てんはたけをまもる神なれば、のう人百しやう、田はたけのあせにつくえをたて、とうみやう百ミをそなへて、しやしよくの神をまつりて、のつとをまいらせへいをふり、きう馬にやまひなく、すいそん、ひそんのうれへをわすれ、しなとの風、物しつかに、田にひいなこのわつらひなく、はたけにほうくろもちのあなもなく、五こくしやうしゆしてほさかへ、かいこのおきふしたいらかにして、をしね、うるしね、

麦・粟・大豆・小豆・あつき・こま・きびのたくひまで、たへら上、たへら、俵のうへに俵をかきね、いねばかりながら、わたはたはねなから、君のねんくに、ミしんもなく、家のうち、ハにきやかに、子の子のすゑさかへてめてたくおハしませと、手をあはせ、ぬかつきていのりにいのりたてまつる、その有さまこそめてたけれ、

「春社の図」

(第三段)

かくて、あら小田のミつぬるむときになりけれハ、つちきり・くさきり・すきくわをもち出、のう人田ことにおりたちて、なハしるをかまへ水ミつをせきいれ、田つくるわさをいとなみそむるほとに、ほんてうのいにしへ、田はたのようすいこころのまゝならざりしに、しやうとく太し世にいて給ひ、かハち・津のくに、四十八かしよのいけをつくらせ、水をたへ、田はたにせきいれさせられしより、

諸国は、しよこくこれにまなひて、川のほとりにハつミをかたくつかせて、つミのしたに樋をふせ、ようすいのいけにきりとをし、水なき田にハミつをいれ、あまる水を流し、かのはねつるへハ、ふかきいよりたかき田はたけにミつをいるの用意也、又、また水のしからみ・わくのいし・しやかこをふせて、ハミつをさえきり、水くるま、りうこつしや、みなこれミつのたよりとして、田はたをつくりぬるたうくなり、かハミつくるまハ、もろこしのきのはきんといふ人、つくりいたして、わかたはたけにミつをまかせられしより、今日ほんまでつたハれり、こまかしこにひとつふたつかハつのなく、こゑきこえつム、くさ葉もやうく、あをミわたりて、田のくろのまハりあせのほとり、田の中までもしけくなり、こそこの田ののかりかふも、またくちのこるおりに、田なつこめを水にひたし、そのもえいつるを

まちつけで、なはしろにまきほとこし、さな
 えになれとこころをいるれハ、むらざとのわ
 らハへも、たねやきこめを給ハらすハ、なは
 しろにいしかめをはなざんといふほとに、
 たなつこめのやきこめをたかひにくはる
 を、さたまれる事にする也、されはにや、
 なはしろにわつらひとなるものハ、いしかめの
 はひいりて、とろつちをうちかへして、おひ
 いたるえうへを「した」にな
 たつさなへをもてかへすとかや、又ハから
 すのおりたちて、田にしをとらんとふミ
 あらしほりかへし侍る、これをのう人うれへ
 として、かなしミ、なはしろのうへになハをはり、
 網をひき、あるひハなるこをかけ、又ハ
 あミをひき、あるひハなるこをかけ、から
 すをおとしはへれとも、やもすれハいし
 亀かめにうちかへさるゝそわひしき、*

「苗代の図」

(第四段)

すてに卯月になりぬれハ、はやまの花は

ちりはて、深山ミヤまかくれのをそざくらかす
 ちりそめて、谷に水になかれていつるはな
 の香ハ、田ことのミつにほふらん、かハつの
 (ナシ)すたくこゑ(ナシ)かまびすふして、山ハミとり
 のかけしけりて、ながき日いとさたかなりしに、
 麦穂のほやうくかれゆけハ、名におふ今は
 麦秋とて、時にあたれるおりからなり、うし
 ハ子をうみてふくろつのおひいつるほと
 になれハ、野かひのくきにつきてはねを
 とり、母うしのうしろにまどとりてうれしけ
 はしめてむまれし時ハ、はとつれてかま
 とをめぐり侍るハ、うふすなまいりをするなるらん、
 そたちあかるとも、二家の合牛となら
 (ナシ)させ給ふな、又はなつらとおさせ給ふな、あし
 ハつちすなをはねさせ給ふな、つハやふ
 くりにおひいてさせ給へ、たちのやまひ
 なくちからつよかれと、いのり申すとかや、い
 つしか大(ナシ)きにそたちあかれハ、はなつらをと
 をしつなをつけて、草かりのわらハへその

せなかにうちのり、野へのくさむらに
 ゆきいたり、草くさかりかまを手ことにもちて
 かりたはね、うしにおふせて、又うちのり、
 草くさかり歌くさかりふえとりくふき
 ならせハ、こころつたなきうしなれとも、おもし
 ろうやおもひけん、耳をたれおをふりて
 道みちを行こそやさしけれ、としおひたる祖
 父ハ、いとけなきまこの手をひき、はたけ
 とりにゆきてミれハ、わかきものとも、
 かりかまのやいはをみかき、ち出て
 はねそろへ、うしにつけ馬におふせ、又ミつ
 からかたになひもちて、いへのうちに
 はこひいるゝ、うはよめ・しうとめ手にくくと
 りおろし、穂なミをわけてこきひらく、
 四十日のわせむぎ・かちかたむぎや
 おほ麦・小麦は
 大むぎ・こむぎハすこしをせけれとも、
 おなし田はたのうちなれハ、只うねくハかはり
 いつれもほのたけなかく、くるほのむぎハ
 くれと、いつれも穂なみは
 さらになし、*

「麦刈の図」

(第五段)

さて、かりいれたる^入麦^麦のほをききひらき、
むしろにいれ、わかき女はうあまたいでたち、
かしらのかみうつくしう、あかきまへたれ
ひもなかく、からさほといふものにて、^歌
にあはせてこれをうつところもあり、

君をまつよハ夏の夜なれと、いとね
られもせぬ、ものうし、いよあけかねて、
殿子
これのとのこハ、やれめたいとのこ、
松
まつのみとりのすゑなかく、いよさかへ
久しや、いよ久しかれ、
なとらうたひつれたるご参るハしうして、
歌
うたのこと葉ハあつもうたにて、ひなひたり
けれと、さいはらにもあらで、またおもしろし、
麦
むきつきうすといふものにいれて、うす
つき歌をうたふてつくも又おかし、
面
我ハ田のもの夏くさなれや、いよ人にひ

かれて又すてらるゝ、やれすてらまじ、
つきあけてのち、箕
さて、又これをミのといふものに入れて、風にまかせ
てぬかをとほせ、^麦むきほしのむしろに入て日に
ほす、さしもいとなミハくるしけれと、たはらに
いれ
入てつミたるハ、いとにきやかにおほゆ、
「 麦打の図 」

(第六段)

そのあひたに、かいこをやしなふ、二月のむ
まの日に、こたねかみよりむまれいつる、また
としのさむけれハ、くハのめわつかにハ、
葉也、^葉はにやうくめくみいつるハ、あまぢまほしに
いのりて、かいこのあからしまにたふれさ
らんことをねかふ、かくてかいこたねのうへに
かいこすたれをしき、そのうへにかいこむし
ろをしきひろけ、^{らき}かいこをうつして、これを
やしなふ、田つらにうへしくハのはを、かこに
つミいれ、^桑くハきりにてきりそろへ、かいこの
上にあたまきちらし、三たひふして三たひ

おぎ、きぬぎ
をきぬ、ぬきかへてしろくなり、いとをは
きてまゆをつくる、そのまゆのかたちハ、庭
鳥
とりのかいこにいたり、うちなるかいこハ、て
うになりつゝ、たねかみに子をうみて、行かた
しらすとひさりぬ、わたにつくるハ、^ハ日にほし、
いとにするまゆをハ、^ハかまにいれてにるとかや、

「 養蚕の図 」(柳本)○福岡本ハ連続スル

さて、いとくちをかけたし、いとくりくるま
にくりかけて、わくくるまにうつし、たてぬき
をそろへをさにいれ、はたにあけてこれ
をおる、^{ぬき}をさまき車ぬきのくたひに入
てうちわたす、^密まとちかきををさをと
きりはたり、ちやうく日をかさねてをるほ
とに、寸よりしやくになり、^尺しやくよりちやう
にをりのふる、そのいとすちのたかハすし
てきぬになるこそくるしけれ、あやしのし
つのめののかわざとてをりいたし、^出さら
ハわか身の衣ならで、^国くにのミつきや君

のため、かさぬるそてこそうらやましけれ、
神代世のそのかミハ、あめわかひめのみこと
よりを初はしめ給ひて、さて中比ころにハ、
もろこしより、くれは・あやはの二人のをり
ひめをわかつてうにわたされしより、いろく
のをりものを、日此ほんにもならひけり、

「養蚕の図」 (福岡本)

(上巻終)

(第七段)

五月のころになりぬれハ、しての田成おさハ
雲井のにもよほし、むめの雨梅かきくらしてふり
つゆく、水かさまさりて、川もふかくなかるれ
ハ岸柳柳は、きしのやなぎハえたをひたし、つミのあり
さま、ミつこえてくつれぬへくおほゆれハ、のう
人にんのともから手をあかき、あしをそらになし、
土俵土俵とひやう・いしのかここまかしこをふせきとめ、
しにからすきうちかけて、あら田をすかせ、
おひまはず、田ミの・すけかさも、よこきる雨

にハぬれとをる、中々かゝるわさならてハ、世を
わたるへきわさもなきかと、いきもつきあへず
田つらをならし、草草きをほらひ、あせをたて、
くろをさため、水水をたへて、やすみをり、うし
はくるしきいきをにれをかミ、あえきにあえ
くそいたハしき、人のちからをたすくるもの
といひながら、わか身我のうへにつまされて、さ
こそハなんちもくるしからんと、いたへるもこと
ハリなり、もろこし人ハ、うしをあいして、黒牡丹
となづけられしも、人にかハりてちからをつく
し、かうさくのたすけとなるゆへなり、五月
の中にかゝりて、はんけしやうの日もちかし、
いかにさをとめさなへをとり、田田をはやく
うへつけよと、祖母うはやおうちにいさめられ
て、わかき子ともハハしろにかゝり、さなへを
ひきひきあしかにのせ、おうこをさしてになひつ、
田つらにゆきてくはりわたす、さをとめハ
うけとりて、こゆる田歌面そおもしろき、雨ふ
らねとも日時てりかき、雨ふるときハひちかきや、

かつく袖笠いとせはく、世世わたるわさとすけ
のかき、すそハ田水水におりひたり、ぬれにそ
ぬるハハかりなり、歌国ハくにハより、ことはハ所
によるとかや、あふミのこくぶ・国風に、
雨ハふるともなにひそく、ミのかきもな
にいそく、いらぬになに恋にき君ににたに
あふといふならハいそく、手にとるさなへ
もすてハゆかまし、なにいそく、
今年よりうへ田ハさかへていそく、ほに
ほかさなれいそく、めてたしめてたし・せんさい
らくや万さいらく、
とうたふて、田ハうへわたし、よろこぶとかや、
たんはの国こくぶ・風の歌うたに、
春のころより、わかねやに通ふ殿子のあ
れとなに、人はに忍はハハかくしかくして、
かたらぬよなん、
さて、うへわたしあかる時に、手手ことにもちたる
さなへをうちふりて、
早稲さなえもおくても、しけるくる田田とさかへて、

秋のミのりハ、ほにほなひきて、心のまゝ
にくらにおさめて、つミもかさねん、一りう
まん、万はい、二りう、万はい、とておとりよる
こふとかや、

「田植の図」 (福岡本)

(柳本) 田草取

(第八段)

水無 木 涼
みな月のころになれハ、こす多すしけ
蟬 聞
に、せミのこゑハきこゆれと、あつさハいと
たへかたし、てりにてりたる日のかさなれハ、
田のミつすてにかハきあかり、さなへハねを
まくおりから、日ころたへしうすいの、
池 水
いけをくむこそくるしけれ、翻車のミつ
くるま は、りうこつしやといふものなり、筒車
の(ミ)つくるまハ、つまくるまといふものなり、
池 輪
いけにさしひたし、わをきしり、ちくを
し、ミつをまかせてせきいるゝ、さしもに
あつき多んでんハ、さなからこしきにむさ
ことし 天
るゝかと思ハれ、なかるゝあせハ地におちて、

水 友 水底
ミつもろともにやたゝゆらん、みなそこにすむ
亀 なら
かめのたくひにハあらねと、うしろを日にほし
て、いきもつきあへす、くるまをとして水を
息 車
なかつ、川にたてたるミつくるまハ、なかれに
まかせてをのつから、めくるにつけてくミいるゝ、
水 心 滝(ナシ)
水のこゝろもしられけり、山よりおつるたきの
水 につたへて
ミつを、かけひのたよりにせきかけてとるも
あり、とくすれとも (ナシ) 池
とかくすれとも (ナシ) 池
け水にハかきりありて、そこよりわく事
すくなければ、いけもかハきハあかりて、川
水を浅くなりて、車を
水もかれくにて、なかれのす多のミつくる
まも、めくるちからもなけれハ、田の面ハいよ
くひあかれハ、のう人百しやう、むらさとの
わかきもおいたるも、地ぬしの秀倉や、う
ぶす 主 ほこら
ぶす 主 秀倉や、う
ぶす 主 秀倉や、う
こそいたしけれ、をよそ雨こいのことハ、いこく
天
てんちくみなこれあり、そのありさまハしな
くなり、ふつほうの上へ、ほけきやうの
やくさうゆほん、あるひハ請 雨 経、そのほかに

真言
しんこんのをこなひあり、世々のめいそうたち、
行 力
きやうりをあらハし、雨をふらせしそのため
し、かすくしるしをかれたり、又わかつてうのい
にしへ、神代より、はしまりて、しんたうのおこな
ひあり、又中とミのよしのふのあそんハ、雨
ふらせ給への歌、よみて、雨をくたせしためし、
雨ハりうしんのわさにて、かんおうあれハ、すな
ハち ふるもふらぬもゆへあるへし、ぬ中の村
里に雨をねかふ雨こひにハ、ミのかさをきて、
あをきへいをきり、とうミやうをかへけ、くもつ
をそなへ、神おとりといふ事をはしめて、あめ
ふらせ給へくと、歌にましへて雨をいのるに、
ふらすといふ事なし、されとも時にあつて、
雨こひすれとも、ふらさるるためし有、いか成ゆへ
そとたつぬれハ、ふえと太このしわざなり、
ふへの音にハ、ひよりやひよりとぶき
ならし、太こをハ、てれつけくと
*うちはやすときは、かならず雨ハふるへからすと、
ふるき人ハ申されし、

「灌漑・雨乞の図」

(第九段)

かのものこしのとうはといへる詩人ハ、喜雨亭記
 ていのきをつくりて、雨のふりて田をうる
 金銀・しゆきよくのたくひハ、まことにめ
 したきたからなれとも、うへたる時にしきと
 ならず、こゝへたるときにもならず、
 田はたけに雨そゞきて、五こくゆたかにみ
 のりつゝ、とりおさむれハ、人をたすけ、うへこ
 へたるくるしミをはらふ、これまことのたから
 ならずや、地ふくハ万ふくのごんけん、五こ
 くハ万ものもとなり、かん書には、きうりう
 を立たり、その中のうりうとて、かうさく
 を第一とせり、又おうやうしゆハ、きうりう
 へんをつくれり、されハ、ふる雨のこさめにふり
 てはれあかれハ、ふることハ一時にして、五こくハ一
 年ゆたかにして、十日に「たひ雨ふりて、田

のミつさらにすくなからず、さすかにいなは

水こえず、うるほひすてに時をたかへすは、
 田家何てんかのうふなにをかくるしまん、ひやう
 宮きうのたのしミも、これにハいかてまさるへき
 や、すてに田の面にも雨うるほひ、さなへを色
 をなおして、のうふハよろこひのまゆをひらく
 南薫なんくんの風にハいなほあかくなるといふ
 に、あゆちかたのかせふきて、いけ池水おもて
 にしわをたミ、いな葉くろミて、すき間もな
 し、その間にふきのかうほね・ひるむしろな
 といへるもろくのくさおひ出で、いな葉
 これにあれなんとす、田の草をとるにハ、
 一はん・二はんと名つけて、第三はんにとり
 おさむる、されは、おとこ・女、おいたるもわかきも
 田のミつにおひたりて、くさをとる歌
 こそおもしろけれ、日ハてりてりして、あつさ
 へたえかたきに、ひるといふむしの田の中
 にありて、人のあしにとりつき、ちをすひく
 らう、そのかたちいちこの

「豊稔見分の図」(柳本) ○錯誤ナリ、

(第十段)

ミのけのこくみゆるなり、そのあとハかさ
 なり、いたみひらゝく事もあり、此くるしミの
 中よりも、おもしろき歌うたふ事、かこの鳥の
 とへてとるならハ、
 色音面白、おなしかるへしや、
 いろねおもしろくさえつるにたたふへし、あまり
 のことのくるしきに、せめて歌にやなくさむらん
 春田の小田に、そたちかへるこ、そたちあかりて
 ながき草葉になかくれそよ、へひのすむかも
 しらぬくさはにかくれそよ、
 ○(柳本) 紙ヲ補足シ、散シ書ニセリ、
 「なとうたひつれて、田くさをとるもくるしきや、」
 「田草取の図」(福岡本)
 納言経信の、
 大なこんつねのふ脚の歌に、
 ゆふされハ門田のいな葉をとつれて
 あしのまろやに秋風そふく
 はや秋もなかはになり、はききのうハ風ふき

おちて、^{秋した}はきか下葉にかよふらん、名におふ
 もち月のひかりさやかにてりまさり、^虫むし
 のこゑ／＼うらむるおりから、^{わたた}早田ハほなミかた
 ふきて、^はおくて田の花ハさかりなり、しなどの
 神にかけても、^{はら吹}あらし風ふきくるなど、いく
 ハはく心をくたくらん、もし風ふけハ花ちりて、
 面^はのいのねハたてなからかれはになるこそ
 悲^はかなしけれ、春のあら小田かへすより、^夏なつ
 あつさをしのきこし、水をせきいれ、^草くさを
 とり、身をくるしめ心をくたき、今ハはやわ
 さ田・おくて田うちつゝき、^みほなしすゝしき
 心ちする也、^時一ときあひたに、吹しほるあら
 き風にもまるれハ、^は日ころしんくのいと^辛苦^{ナシ}も
 たち^{なりゆく}立まちむなしく成^行なり、あるひハ又、目を
 かさねてはるゝ^隙ひまなき秋の雨、ふりつむ水の
 しけ^はレハ、^涼すゝしき風もむしあかり^て、これより
 いなこのわき^出いてつゝ、あるひハねにおひし、
 あるひハくき^生にやうし、またハはにわき
 穂^はにわきて、一夜のうちにかれ野となす、

世にハいもち^仁となつくるなり、いなこハ、これ水
 中^魚にうほのこありて、^冬ふゆの雪ふらねは、
 け^化していなことなるとかや、雪ハほうねんの^{豊一年}
 ミつきものといへるも、このゆへなり、^歳さいせいと
 いふほしは、五行の中にハ木をつかさどれり、
 此^星星^{すてにしん}のほし、心といふほしはやとりに入ぬれば、五
 こく^{ナシ}大きにゆたか也、^唐されハ、たうの太そう
 の御とき、^時天下の田ことに、いなこのおほく
 わきいて、^宗田をからす事おひたし、^太太そ
 うく^皇ハうてい、^帝身つからいなごとり給ひ、そ
 れいなこによりて田を^{そこな}からさハ、^{天下}天下のた
 み^民み^えなうへてしすべし、おほく^只天下のた^朕を
 ころさんより、^只ちん一人をころすハしと
 て、いなこをいきなからの^生ミ給へハ、^{天地}天地これ
 をかんして、^{うち}一夜の中に、^諸しよこくのいなこ^ナ
 とたえにけり、^又魯恭^{ろけう}またろきやうといふ人ハ、^中中
 牟^{ちうぼう}ちうぼうといふところの代くハんになりて、^民た^百百
 しやうをあハれミ、そのめく^み鳥けたものに
 をよひ、その^{むら}村里のなんによいとけなき

子ともまて、^仁みなしんぎやうのみちをおこ
 なふ、あるとし、天下の田にいなこわきて、
 くらひからしけれとも、^魯ろきやうか^代代くハんせし
 所^のころハ、^畔村里の田にハあせをさかふて、^蝗いな
 こなく、^めめてたく秋のミのりをえたり、しかれ
 ハ、^五五こくのよしあしは、^国そのくにのあるしを
 はしめて、^郡くんだい^代代くハんのころのをこ
 なひによるへし、^姓民百しやうハ、^国そのこくしゆ
 を君とあふきたてまつる、^代そのたいくハんに
 て、^欲よくふかくなきけをしらすハ、^事よきことあ
 らんや、

「豊稔見分の図」 (福岡本)
 「糶摺・俵詰の図」 (柳本)

(第十一 段)

今の世にハ、^蝗いなこある事ハ、^年むらく^里ざとく
 出^出いてあひ、^夜夜に入^{いりて}たいまつをともし、^松ふえ
 太^太こにてうたをうたひ、^歌田むしをくりの
 まつり^をして、^流川にをくりなかつとかや、^也風の

音をとすましく、むしのこ多くなきよハリて、
長月の夜さむになり行ま、雲のたすま
ひものすこく、しきたつさハもくさかれて、
田の面もかりも友まとふおりから、おくて田
のほなミかたふきて、かりいるゝ時に成けり、
はたけにハ、むぎまきおさめて、とるなハ
かりにおひいてぬ、わかきおのことも、いねに
かまかりかまのやいはをみかき、田つらにおり
たち、かりたはねて、いな木にかけほす、うち
つゝきて日なミよく雨ふらねハ、うしにおほ
せ、むまにとりのせ、かたになふて、にハに
はこひいるゝそ、老たる、おうちいとうれしけに
にて、門にいてつゝみるも、心のうちさこそ
とおほゆ也、いなむしろしきひろけて、こき
ひらき、もミさらい、手にくもちてかきほし、
唐からうすにとりかけ、もみすりおろし、もみ
ふるひ、ゆりわにいれて、すりぬかどりは
らふこそ、めでたけれ、たハらをうけては
かりいるゝ、たハらくち、ゆひしめて、たて

なわよこなハうちかけ、いなくらにかさね
あけ、つミあけたるハ、まことによるつ
のたからといふとも、これにハまさらし、
心のうちのたのしき、大ふくとくの
長しやならずや、
「取入の図」(福岡本)
「検数・倉入の図」(柳本)
(第十二段)
くにたいらかにおさまり、われらやすら
かに世にすむ事、わか君の御めくミふかく
おハしますゆへならずや、さらハ、御ねんくの
ミつきをそなへたてまつらんとて、地とう
代くハんにあんないする、たいくハんきうにん
出、むかひて、ちぎやうのたかをあらため、
たハらをかそへてくらにおさむる、今年ハ
いつよりも、秋のミのりハ十はいして、田にハ
おちほのこり、みちにハこほれしぬかあり、
ゆたかにおさまる御代のしるし、めくミあま

ねき時をえて、君の御くらはこひ入る、
たハらのかすハかぎり、なし、うちかさね、
つミあけたるにきやハしき、さけたうへて、かへ
るへしとおほせいたされしかハ、百しやうとも
ハ大きによろこひ、御くらのまへにしかうして、
上よりくたる御さかつき、かすくめくるあり
かたさに、ひしりの御世と申、共、今この君にハ
よもまさり給ハしや、君ハ千代ませくと、くり
ことをいハひ、歌のこ多もたのしむさかもり、やか
て御いとままかり申て、わかりくに立かへり、
「糶摺・俵詰・倉入の図」(福岡本)
家のうちにぎやかに、たのしみにあきみち
て、ふゆこもりゆるやかなり、はや立春のこと
ふきを、けふそむ月のことはしめ、としわすれ
のあそひとて、一もんのこらすあつまりて、君
のめくミをあふくなり、たのしむ御代、そ有
かたき、

(下巻 終)